カナダ移民・ボリビア移民・ハワイ移民・満州植民への視座

― 国際関係とそれぞれの日系社会の基本的特性 ―

天沼　香

はじめに

本稿は、「マクロな移民研究とミクロな移民研究の有機的連関のために」（天沼、2004）、「日本における資本主義の発展と移民送出との相関関係～後発資本主義国日本の出移民の普遍性と特異性をめぐる考察」（天沼、2005）、「移民のモティベイションに関する研究序説～オーラル・ヒストリー、コレクティブ・バイオグラフィー、ペルソナグラフィー、パーティシパント・オブザベーション～」（天沼、2006）の続編的意味合いを有する論考である。

さらには、「カナダにおける初期日本人移民の歴史的状況～ Collective Biography を中心に～」（天沼、1984）、「移民史への視座～」（天沼、1985）等とも絡み合ってくる論考である。

これらの拙稿をものしていく途上で得た知見等々をもとに、新たな考察を加味して、全体としての「近代日本における移民」を整序的にみるための前段階として、国際関係と移民との連関性を再考し、さらには、カナダ、ボリビア、ハワイの日系社会の基本的特性を探ったのが本稿である。

本稿は、2003 年度、筑波大学日本語日本文化学類における特別講義「移民文化論」の続講として 2005 年度に開講された同大学同学類での特別講義の原稿をもとに、纏め直し、書き下ろしたものの一部である。

1．近代における無産労働者と移民の位相

資本主義の発達に伴い、農民層分解が顕在化し、無産労働者になる層が析出され、彼らが農村から都会に出て行って、工場労働に従事するという状況が恒常化するという近代の流れは、ごく常識的に理解されている歴史的事実といえよう。

この無産労働者が、資本主義発達のうえで非常に重要な意味合いをもつ労働力となる。彼らこそが、資本主義的拡大再生産に実質的に寄与する存在だったといえよう。

移民という存在は、そうした人々とは違う意味合いをもっている。資本主義の発達に伴って、農村において生活がやりゆけなくなった人々という点においては、都市へ出て行った無産労働者になる層と似通った意味合いを有する存在だが、移民の人々の場合には、その足が都市へは向かわずに～つまり無産労働者化せずに～直接、海外に出て行くという道を歩むのである。勿論、無産労働者化した人々が、都市での貧しい、下積みの生活に耐えられずに海外への移民を試みるという事例もあったけれども。

この事実は、移民を第一義的に規定する上で重い意味合いをもっている。つまり、なぜ移民を研究するのかを考える場合に、各々の国々における資本主義の発達と移民とを、どのような関連性をもってみるかという命題が非常に重要になってくるからである。私も、先の拙稿（天沼、2005）で触れた通り、日本における資本主義の発達と絡み合わせながら移民を捉えたいと考えている。

特に後発資本主義国である日本は、既に日本が近代化に入ろうとしていた時期にはもはや西洋諸列強は近代化を終えていたという冷厳な現実があったので、その現実の下に自らの国を創成していかなければならなかった。

西洋諸列強においては、資本主義化が進んでいく流れの中で、原料供給地兼製品の市場という好都合な場所として植民地を獲得することが至上命題になり、その植民地を獲得することと関連して、移民が活発になっていった。

こうした西洋諸列強の近代化の状況が、隆盛を極めている頃、あるいは、もはや一段落した

頃、日本は漸く開国をし、近代化の道を辿り始める。それ以降、日本の資本主義化が進展していく中で、移民、あるいは、植民が考えられることになる。後発資本主義国家、後発植民地主義国家、後発帝国主義国家であった日本にとって植民地獲得は容易なことではなかった。

西洋諸列強との軋轢の下にそれを獲得していかなければならなかったし、また移民をすることに関しても常に西洋諸列強との軋轢の下にそれをしていかなければならなかったのだ。

2．排斥・排日

結局は、その軋轢が日本人が移民した先の国々における偏見、差別、そして排斥に繋がっているといえよう。排日という言葉すら出来した。今日でも、排斥・排日は日系人にとっては忘れ得ない日本語だ。一世、二世はもちろんのこと、三世、四世、五世の人々にとってもいまだに非常に重要な意味合いをもっている言葉といえよう。

この排斥・排日が高じていって、ついには第二次世界大戦中における米加両国（アメリカ合衆国と英領カナダ））政府による日本人移民、日系人の強制収容という非人道的な措置にまで至っている。先発の資本主義国家たる米加両国と、日本という後発の資本主義国家との間で、移民の人々が自らの意志とは全く関係ないところで翻弄されたのである。

排日・排斥は、第二次世界大戦中及びそれ以前においては、移民の人々にとって日常的な出来事だったばかりでなく、国家間の関係に関連しても重要な意味合いをもっていた。前掲拙論でも触れたように、極端な論調としては、米国で1924年に排日移民法が成立したという事実が結局は、日米間の戦争を誘発する大きな原因となっているといった言説まで登場していたのである。

そして、こうした排斥・排日の動きは、後述のように、日系社会のあり方を大きく左右する要因ともなる。排斥・排日の動きが著しかったところでは、日系人の集住する地区という物理的な意味における日系社会は衰退していったのだ。

3．内村鑑三・柏木義円・阿部磯雄らの移民に関する論調

内村鑑三のような、日露戦争に強く反対した人物まで、それこそ２つのＪを愛する立場から、排日移民法案へのクーリッジ大統領の署名に対しては強い異論を呈している。長らく断交していた徳冨蘇峰と関係を修復し、『国民新聞』等で〈日本国民に対する大侮辱〉たる同法反対のキャンペーンを張るなど、かなり本腰を入れて反米的な世論を主導したのだった。

日本の現状に不満を抱き、それだけに日本人の移民先に仄かな希望を見ていた鑑三だっただけに、排日移民法に至る米国の動きにはいたく失望したのだった(『内村鑑三全集』第28巻等)。

しかし、同じキリスト者であっても柏木義円などは、～そもそも日本では、日本魂ある者が外国に帰化するなどということは非国民だとし、日本人は永遠に天皇の臣民でなければならない云々といった風で、他国への帰化などはよしとしない風潮だったのに～、「差別待遇の本体たる彼の帰化法に異議を唱へないで居て、･･･移民法が出稼人を拒むのを不義不法として之を攻撃するのは、聊か論理を成さないやうに吾人には思はる」（「上毛教会月報」308号、1924年7月20日）等と冷静な見方をしている。

安部磯雄なども「今日日本人が高調して差別待遇、侮辱などと慷慨悲憤血を沸かして居るのは聊か的を外ずして居る・・・。全体我国論の米国非難のポイントは所謂差別待遇に在るのか、将た移民禁止に在るのか。・・・唯帰する所は国家の体面問題丈けであるが体面など云ふことは多くは考え方に由るのである」（「排日と社会の反省」、『廓清』、1924年6月号）等、過度な反米的風潮を戒めている。

が、こうした柏木や安部らの言説は少数派だった。世論は米国の差別的移民法をもって着実に嫌米から反米へと転回していた。同法を論拠とする対米開戦正当化論まで出現する。

けれども、そうした論にまで至ると、これは日本の側の侵略戦争や覇権的態度に対する弁護論になってしまう。歴史的事実に照らし合わせてみても、説得力ある見解とは言い難い。

しかし、先発資本主義国家にして、先発移民

送出国の人々が多数を占める米加両国、わけても米国における日本人移民・日系人への排斥、排日的状況、そしてその集大成としての排日移民法の成立が、戦前日本国内の嫌米・反米感情と無関係だったとは言い難いこともまた事実である。

4．国際関係と移民

個々人が移住を目的として、ある国から他の国へ出て行くという状況のあり方、そして、移住先でその個々人に降りかかった差別、偏見、排斥、セグリゲイション等の状況のあり方は、国家間の関係の影響をもろに受けるものだった。また逆に、上記のように、移住先における移民の遇され方が、国家間の関係に影響を及ぼすこともあったのだ。

そうした意味において、移民は国家間のドラスティックな関係の変化に翻弄される存在だったといえよう。国家の状況や国際関係と、個人史との関連性を見て取れるという意味合いにおいても、移民研究の重要性は明白である。

例えば、明治42年の段階で、既に当時の外相、小村寿太郎が移民の満韓への集中を提起して以降、北米大陸等への移民が難しくなってきているという状況認識のもと、そうした系譜に連なる論が、排日運動が北米等で続発する中でより一層、喧伝されていったように、国際関係と移民とは、大いに相互連関性を有しているのである。

米加等の国々が日本人を受け入れようとしない事、そして、米加在住の日本人移民や日系人の人びとが差別され、良い生活状況を享受できていない事等に鑑みて、日本がもっと直接的に影響力を有している場所である満州、朝鮮へ移民を集中させようといった論が力を得てきたのだ。

現実に、1930年代半ば以降において、満州開拓移民という名の植民が国家政策として、日本帝国主義の先兵として奨励されることになる。もとより私は、日本がアジアの国々を侵略し、中国や朝鮮等々の人びとを苦しめ、傀儡国家・満州国をでっち上げたことを正当化する意図などは全く持ち合わせていない。

けれども、移民国家であるはずの米加また南米諸国、あるいはオーストラリアといったような地域、国々がそれぞれ白人中心的な志向を強めて、自らも移民であるにもかかわらず、後発のアジアからの移民を差別し、排撃し、制限したことは、後発資本主義国家たる日本に閉塞感をもたらしたことは事実として再度、確認せざるを得ない。

繰り返すが、私は、日本の満州国建国や韓国併合等を是認するものではない。それらは近代日本の恥ずべき誤りだったと認識している。他方で、日本人移民、日系人を巡る当時の米国、カナダ等の国内状況は、極めて不穏当なものだったし、その事実は日本の対米政策、アジア政策、そして日米間、日加間等の国際関係に影響したことは否めないとも考えている。勿論、だからといって、アジア諸国への侵略が免罪されるわけでは毛頭、ないけれども。

5．榎本武揚の開拓したのは「移民地」

新大陸への移民の道を閉ざされた日本が、中国大陸や朝鮮半島に人口移動の活路を求めたという側面は否定はできない。しかし同時に、満州への日本人の人口移動は、同地における日本の主権を実体化する植民地化の一環ともみなさざるを得ない。であるから、日本の主権が全く及ばない南北米等への日本人の移民とは自ずから厳別して考えなければならない。ただ、日本国内の口減らしという点、そして不満分子を海外へ移すという点～一般的に国内における不満分子を外へ出すことによって国内の安寧平穏を保つという方策は、古今東西どこにでもみられる～においてであれば、南米、北米、あるいは満州、台湾等々への人口移動は共通性を有していた。

戦前の日本において、「植民政策」学という学問はかなり盛んだったが、「移民政策」学という学問は殆ど体系化されていなかった。そもそも移民という語彙は、植民という語彙よりも国家との絡みが少ない分、「政策」とはなりにくい面があったのかもしれない。

したがって、戦前、南米、北米、その他の地域への移民を奨励する書物がよく出版されてい

るが、そうした書物をみてみると、南米植民、メキシコ植民というような名称が冠されていることが多い。例えば、榎本武揚は移民地経営や移民送出に対して非常に強い関心を持っており、自ら、同志の人びとをメキシコへ送り出すことまでやってのけたが、その彼の主導した移民地も「榎本植民地」という名称でもって語り継がれている。

21 世紀の今日においてすら、うっかりすると「南米における日本の植民地」といった表現がなされたりする。これはコロニーとかコロニアという語彙をそのまま素直に日本語に訳した言葉といってしまえばそれまでともいえる。しかし、学問的に厳密に規定しようとするなら、やはり、これは誤用といわざるを得ない。移民と植民とは、異質の存在として捉えられるべきものなのである（この辺り、詳しくは［天沼、1985］参照）。

6．ハワイにおける沖縄出身の日系人

近年にいたってようやく、移民研究は広範な学問分野から行われるようになってきた。私の視座である歴史人類学的な観点からの研究のみならず、歴史学、社会学、経済学、政治学、あるいは諸々の理科系の学問分野の観点、さらには医学的な観点からの移民の研究もなされている。

昨今では、健康に関して人々の関心が高まってきたことと関連してであろう、例えば、なぜ沖縄からハワイに移民した人は非常に長生きをするのだろうか、といった事実に着目した疫学的研究等も展開されている。

これらは公衆衛生学、食物栄養学、健康科学等の学問と密接に関連している。すなわち沖縄からハワイに移民した人々はどうして、生活の質を保ちながら長生きをするのだろうかという命題が立てられ、その命題を検証すべく、彼らを取り巻く環境、衛生観念、食生活、彼らの日常生活、人間関係等の観点、あるいは疾病の問題等々に着目する学際的な調査研究がなされるのである。

私自身、フィールドワークの結果から、たしかに移民をした先によって、物心両面における生活の質や平均寿命がかなり違うこと等を事実として認識せざるを得なかった。元来、沖縄県は日本でも一番の長寿県だが、その沖縄の人びとがハワイへ移民し、そこで生活をすると非常に長生きをする事例が多い。90 歳、100 歳の高齢者がたくさんいる。しかも単に 90 歳、100 歳なのではなく、その年齢になっても元気に働き、日常生活を謳歌している。ＱＯＬ（クオリティ・オブ・ライフ）の観点からみても、相当に高い水準を保っている事例は枚挙に暇がない。では、そうした事実の背景には、如何なる理由があるのだろうか。

上記の学問分野の成果に鑑みるならば、一つには食生活が大きな影響を及ぼしていることが考えられる。同じ沖縄からの移民の人々でも、ブラジル等に移民をした人びとは、ハワイに移民をした人びとほどには平均寿命が長くないことを統計数字は物語っている。

勿論、この長寿問題は、食生活の面だけで計りきれるものではない。けれども、ハワイにおける日系人～沖縄出身の人々も含むハワイの日系人～が摂取する肉は豚肉が多いのに対して、ブラジルやアルゼンチン等に移民をした人びとの肉食の場合には牛肉が多いという事実は示唆に富む事実といえよう。

同じ肉食でも、豚肉を中心に食するか、あるいは牛肉を中心に摂取をするかが、健康や長寿に少なからず関連しているであろうと考えられるからである。さらに、ハワイは気候温暖で過ごしやすい。生活のペースもゆったりしている。

もちろん、アメリカナイズされてしまった今日では、米本土並にせわしなくなっているところは多々ある。しかし、それでもまだ、ホノルルのような大都会以外では時の流れは緩やかなのだ。それが精神衛生上、悪いわけはない。

さらには、沖縄は非常に人間関係が濃密なところで、それが時と場合によっては人びとにストレスをもたらす要因となることも皆無とは言えない。けれども、基本的には、この濃密な人間関係が、沖縄の人びとにとっては物心両面における心強い支えなのである。

この沖縄における、ゆったりとした時の流れのなかでの相互扶助の関係、祖先から子孫まで

を包含しての人間関係の豊饒は、人びとの心を非常に安定させる効果があることは言を俟たない。このように人間関係の面や食生活の面等々から、沖縄からハワイに移民した人びとの健康・長寿等に関する調査研究がなされたりする。

このように今日では、パーティシパント・オブザベーション等の手法を駆使した文化人類学的方法、オーラル・ヒストリー等の手法を用いた新しい歴史学的方法、史料批判に基づく伝統的な史学的方法、統計処理を重視する社会医学的方法等々、文系・理系に渡る多岐な方法、観点をもって学際的に移民に関する調査研究がなされるようになってきた。

そのことによって、日系社会のありようは、より立体的構造的に明らかにされるようになってきているのである。

7. 実態をなくしつつあるカナダの日系社会 (1)

日本では、カナダ移民は北米移民ということで、長らくアメリカ移民と殆ど同一視され、したがってアメリカ移民ほどにはきちんと研究が蓄積されていない。カナダへの移民を多く輩出した和歌山県の旧三尾村が「カナダ村」ではなく「アメリカ村」と愛称されていた一点を取り上げても、そのことはご理解いただけよう。
北米移民として、アメリカ合衆国に行った移民の人々と英領カナダに行った人々とは、同様な存在として考えて差し支えない面もあるけれども、両者それぞれに違う面も少なくない。しかし、その違う面に関する調査研究はまだ遅れている。

北米移民という時、アメリカ合衆国への移民にばかり目が向けられがちだった過去に鑑みて、北米移民といっても米国ではなく、カナダへの移民もあり、それにはその独自性が有ることを明らかにするためにも、私はカナダ移民の調査研究にも力点を置いてきた。

カナダ移民の特徴は、日本人の移民先としては米国と並ぶ先進地域への移民として捉えられることだ。さらに、カナダにおける日系社会は、今日では最早「日系社会」といえる実態を喪失しつつあるという現実に直面していることも大きな特徴と言わなければならない。

これは、日本人移民、日系人が戦時中にリロケイト（転住）させられたこと（＝実質的にはインターンメント・キャンプ［強制収容所］へ送られたこと）と無関係ではありえない。戦前には、他の移民地と同様、カナダにおいても「日本人街」が明確に存在していた。たとえば、バンクーバー市のパウエル・ストリートの一角、同市の南に隣接するリッチモンド市に属するスティブストン地区の一角、バンクーバー島のナナイモ市の一角等々が日本人移民が集住する場所として知られていた。そうした地区には、歴とした「日本人街」があった。

カナダ移民の場合は、1885 年以降のハワイへの官約移民や 1908 年以降のブラジルへの移民のような、国家政策として大量の移民をコロニー＝移民地に送り込むという類の移民では決してなかったが、戦前には日本人が集住していた地域が明確にあったのである。

ところが、1941 年 12 月、日本とカナダが開戦したことに伴い、翌 42 年には米国におけると同様、日本人移民のみならずカナダ市民権を有する日系人までが、カナダ西海岸から根こそぎブリティッシュ・コロンビア州やアルバータ州等の奥地へ強制的に移動させられることになり、それに連動して、彼らの財産は殆ど凍結されてしまった。奥地の収容所に送り込まれた日系の人びとは、そこで米国の強制収容所において以上に、公私に渡って非常に厳しい、最小限のプライバシー保持もままならない生活を強いられた。

8. カナダ東部の日系人とユダヤ人

しかし、カナダは、日本が負けるだろうことが明確になってきた時点から、インターンメント・キャンプから日本人移民、日系人を出すことを目論見始めた。ただ、その際には非常に限定された条件がついていた。それは、カナダ東部に行くなら、インターンメント・キャンプから出てもいいという条件だった。

要するに、自分たちがもともと生活していた、生活基盤のある西海岸へ戻ることはできないという過酷な条件の下に、日本人移民、日系人は収容所の外に出ることも可能になったので

ある。こうして彼らは、トロントやハミルトンそしてモントリオール等々、未知のカナダ東部へ向かうことを余儀なくされたのだ。

全く地盤のない東部へ移ることは、ますます自分たちが生活基盤を培った西部の海岸地域から遠ざけられることを意味するという認識を持ち、カナダ政府の条件をのんで東へ向かうことを忌避した人びともいた。

他方、その条件をのんで、とにもかくにもインターンメント・キャンプを出て、マニトバ州、オンタリオ州、ケベック州等へ向かう人々も少なくはなかった。

こうして、戦中に敢えて収容所を出た人々は東へ向かい、新たな生活の基盤を求めた。その際、困り果てていた日本人移民、日系人に温かい手を差し伸べてくれたのはユダヤ人たちだった。

ナチスの迫害に遭って、窮地に陥っていたユダヤ人に、本国の訓令に反してまでビザを発給し続け、数千人の命を救った戦時中の在リベリア日本領事、杉原千畝のヒューマニズムに対する恩義の念が、カナダ在住のユダヤ人たちにも宿っていたのだ。

かつてトロントで、私の聞き書きに応じてくれた日系一世のK氏は、縁のない東部で困惑していた時に、ユダヤ人たちが何かにと面倒を見てくれたこと、彼らが杉原という一個の人間の事績をもとに、日本人に親しみと恩義を感じてくれていたこと等を縷々語ってくれたのだった。

民族として被抑圧の歴史に晒され続けてきたユダヤ人の間では、酷薄な状況下にあった日系人に対する同情の念が強かったことは、K氏のみならず、当時を知る多くの古老が証言してくれたところである。

古老たちの話によれば、カナダ東部において、既に経済的には強い地歩を固めていたユダヤ系の人々が、日系の人々の就職に関して便宜を図ってくれたこと等も一度ならずあったという。　日本人とユダヤ人との関係は必ずしも深くはないけれども、今日でも第２次世界大戦時における杉原千畝のビザ発給に関しては世界中のユダヤの人々が感謝の念を抱いている。そして、その恩に報いるかたちで、日系カナダ人や日本人移民がカナダの地で苦境に喘いでいた時には、なにかにと好意的に接してくれたのだった。同じく差別を受けた側、被抑圧の側として日本人は、ユダヤ人との交流をもっと深めていく必要があるのではないだろうか。

9. 実態をなくしつつあるカナダの日系社会 (2)

こうして東部へ行った人々は、～家族単位で三々五々、収容所を出て行ったという経緯もあって～、トロント、モントリオール、ハミルトン等で、いわゆる日本人町的な集住地区を形成することはなかった。「なかった」というより「できなかった」というのが現実だった。

差別され、抑圧される状況下にある人々が、未知のところに住むということになれば、集住したほうが心強いし、相互に助け合うこともできるはずである。収容所を出て東部へ向かった日系の人々が、どうしてそれをしなかったかといえば、また、もし集住をして日本人移民、日系人だけで一地区を形成し、そこで生活をするとなると、またぞろ疑いの目、白い目で見られ、差別され、迫害されることになりかねないという危惧の念を強く抱いていたからに他ならない。

戦前においては、日本人移民、日系人たちは、カナダ西海岸各地で、日本人町的な集住地区を形成していた。それに対して、何故、日本人ばかり（決して「日本人ばかり」ではないのだが）が自分たちだけで集住する場所を作って、そこである程度の生活を確保しているのかといった批判が起きた。このような批判が排日、排斥に繋がっていった事は言うまでもない。20 世紀初頭の北米大陸西海岸における排日的な動きは各地で犯罪的な暴動を引き起こしていたが、カナダもその例外ではなかった。

こうした戦前の状況にかんがみて、集住すること、目立つことは避けようという心情が、日本人カナダ移民、日系カナダ人の間には染み込んでいたのである。そこで、戦時中に、収容所を出た人々は、東部諸都市等では集住はせず、それぞれが分散してひっそりと生活を始めたのだった。

その後、漸く1949年に至って、カナダにおいても日系人がさまざまな権利を回復する事になった。西部に戻れるようにもなった。現実に自分の生まれ育った故郷である西海岸の各地へ戻った人も多数いた。けれども、そういう人たちも、戦前のような顕著な集住地区を作ろうとは最早しなかった。

10. 実態をなくしつつあるカナダの日系社会 (3)

カナダのバンクーバー市、パウエル・ストリート辺り一帯は、戦前においては、かなり栄えていた日本人町で、「リトル東京」と称されていた（天沼、1989参照）。ロサンゼルス、サンフランシスコ、ポートランド、タコマといった北米の西海岸地域の他の日本人街と比較しても、遜色ない繁栄振りを示していたのが、英領カナダのバンクーバー市のパウエル・ストリートの「リトル東京」だった。

しかし、戦後、サンフランシスコやロサンゼルスの日本人街がかたちを変えながら、かなり復活したのに対して、バンクーバーの日本人町は復活したとまではいえなかった。

勿論、パウエル・ストリートに帰ってきて、そこで、なんらかの生業を営み始めた人も少なくはなかった。が、戦前のように、日本人が集住していて、日本的な食料品店があり、日本的な生活雑貨を扱う店があり、日本的な銭湯があり、日本的な旅館がありといった、それこそ日本の町をそのままもってきたような態様ではなかった。

これは、集住することによって差別、偏見が助長されることを避けようという日系の人々の意識を反映するものだった。こうした精神的要因を基にした物理的環境の変化も手伝って、カナダにおいては地縁的な日系社会の崩壊過程が他の地域よりも一層、著しいという状況がある。

こうした状況を放置するのではなく、何とかカナダ社会に日系の存在をアピールし、そうするなかで日系人の結集を再構築しようという動きも出ている。例年、カナダ日系人の「心のふるさと」、バンクーバー市のパウエル・ストリートにあるオッペンハイマー公園で、盛夏に開催される「パウエル祭」もそうした試みの一環である。

御輿が繰り出し、三味線・琴、尺八の演奏があり、力自慢たちが出場して覇を競う相撲大会が行われ、たこ焼き、焼きそば、みたらし団子等々の屋台が建ち並ぶ様は～相撲の出場者の皮膚の色が多彩なことと、警備の担当が白人のマウンッテド・ポリス（騎馬警官）であることを除けば～、日本のそこここにある小さな町のお祭りの光景と変わるところがない。

しかし、この運営も、日系社会全体の熱気に支えられているというよりは、日系人や日本人新移住者の篤志家のボランティア的な活動に支えられている感は否めない。

11. 実態をなくしつつあるカナダの日系社会 (4)

逆に、ブラジル、ボリビア等、南米地域の日系の人々の間にあっては、今日においてもまだ所謂コロニアと称される日系の移民地を確保しているケースが少なくない。又、都市生活においてもある程度、日系の人々がまとまって住んでいる地区が存在しているという事情もあり、日系社会がカナダに比べると、目に見えるかたちで存続しているといえる。

たとえば、それを通婚という観点から見てみると、カナダでは日系の三世、四世になると、最早、その90％近くは他の人種、民族と結婚するのである。

となると、生まれてくる子供は、もはや純粋な日系人とは言えない存在となる。日系と白人系、日系と中国系、日系と韓国系、その他諸々の組み合わせが出来る。殊に日系人男性と白人女性との組み合わせは、戦前ではほぼ考えられないことだったが、昨今ではそういうカップルも存在する。

日系人女性と白人男性との結婚はきわめて多い。日系人女性と中国系の男性といった組み合わせもある。カナダでは、今や○○系と××系というように出自が違う異民族出身者、異人種出身者同士の結婚が常態化している中で、日系人もその例外ではありえない。

戦後、日系人が集住することを避けた（あるいは、避けることを余儀なくされた）ことに伴って、地縁的な日系コミュニティの復活はままな

らず、日系社会の紐帯が弱まる中では、日系人の他民族、他人種との通婚には必然性があったといえよう。

まして戦前から日系人は差別、偏見に対抗するという意味合いにおいても子女の教育には非常に熱心だった。その結果として、日系の二世、三世、四世には、高学歴の人が多い。戦後においては、一層、高学歴になってきている。ということは、取りも直さず日系人が、大学等の高等教育機関で様々な人種、民族の人びとと日常的に接する機会が増大することを意味する。この事実も、日系人男女が、人種、民族の壁を越えて他人種、他民族と通婚することに拍車を掛けていると言えよう。

こうした通婚という視点からしても、日系社会の解体は加速しているといわざるを得ない。今日ではカナダにおいて日系社会のありようを地縁、コミュニティの視点から捉えるのは難しいという段階に達している。

であるから、もしカナダにおいてそれを的確に捉えようとするなら、戦前、戦中の状況との絡み合わせの中で、時系列的にその崩壊過程を見るという歴史的視座が不可欠だろう。私自身、目下、そういう観点からカナダ日系社会を眺めている。

崩壊の度合いの進んだカナダの日系社会であるがゆえに、日系の人びとの状況を早く捉えておかなければ、一層、他人種、他民族との通婚が進み、ごく近い将来において日系社会といえる存在がほぼ完全になくなってしまう日が来ないとはいえない。そんなところから、カナダの日系社会の原像（＝元々の姿）と解体過程をきちんと見ておきたいと私は考えている。

12. 実態をなくしつつあるカナダの日系社会 (5)

柳田国男に倣って言うなら、私は消えゆく日系人の習俗を記録しておきたいと考えているのだ。大正期になって非常に都市化が進み、～明治時代までは日本は明らかに農村的な文化が基層になった社会といえたが～、大正期以降、諸々の面において、都市的な文明が日本人の中に浸透していく。そうした中で、二千年にわたって日本人の多数の一般的な生活を規定してきた水田稲作農耕が、必ずしも日本人の主たる生業ではなくなってくる。

それに伴って、水田稲作農耕に端を発する風俗習慣、年中行事、通過儀礼、民間伝承等の影がどんどん薄れていく。そうした状況に危機感を抱いた柳田国男は、せめて今（＝その当時＝大正期を中心としたその前後を含む時期）のうちに聞き書きをし、それらを記録しておかないと、日本民族は自らの過去の民俗文化を永久に喪失してしまうという認識のもと、自身及び自らの同志を動員して農村文化、日本の伝統的な民俗文化を記録に残すことに努め、独自の方法論としての重出立証法や方言周圏説等に基づいて研究を進めていった。

私の日系社会へのアプローチにも、こうした柳田のような危機意識が底流にある。カナダ社会における日系社会のあり方を見ていると、それこそ柳田が、かつて大正期に日本の農村社会の伝統的なあり方が急激に崩れ去っていくのを目の当たりにして危機感を抱いたのと同じような危機感を私も抱かざるを得ない。であるからこそ、今のうちにその状況をつぶさに捉えておこうと考えている。

13. 動機が明確だったボリビアへの移民

カナダの日系社会のありようと比較するという意味合いも込めて、私は南米では主としてボリビア移民、ボリビアの移民地を継続的に調査している。これまでの南米における日系移民研究といえば、ブラジルの日系移民研究が主で、それに比べるとアルゼンチン、ペルー、ボリビア、パラグアイ等の日系移民研究は遅れている。それらの中で、目下、私は、ボリビア移民に目を向けている。

未だあまり研究が進展していないところに焦点を当てようと考えたことや、ボリビア移民の場合には～もちろん戦前からの移民もあるけれども～、戦後の移民が重要な意味合いをもっていること、特にボリビア移民の場合には、後述のように大状況との絡みで、沖縄出身の人々そして九州出身の人々が多いこと等も、私が同地をフィールドに選んだ理由である。

九州からの移民は、戦後、炭鉱が産業構造の

転換の嵐の中で閉山の憂き目に遭うなかで、離職した炭鉱労働者が海外へ目を向け、ボリビアに活路を求めるといったかたちでの移民の事例が多かった。

沖縄の事情はより深刻だった。敗戦後、沖縄の農耕地が米軍の基地として接収されることによって、同地の人々が自らの生産の場、生活の場を追われそうになったのだ。こうした事態を打開するために、米国・米軍は、追われる人びとの生産、生活のための代替地を探すことを迫られた。その過程で、ボリビア奥地の未開のジャングルが候補地として浮上したのだった。ボリビア国も、未開地開拓の担い手を捜していた。

このようにして米国・米軍の思惑とボリビア国の思惑が重なるなかで、敗戦後、沖縄からボリビアへの移民が強力に推し進められることになったのである。

しかし、沖縄の耕地を奪われた人々に与えられたボリビアの代替地は、どうしようもない不毛のジャングルだった。最初に沖縄の人々が入植したウルマ・コロニーでは、寄生虫に冒されて、多くの人々が病気に罹って亡くなるという悲惨な状況が現出した。結局、そのコロニーは閉鎖を余儀なくされている。

辛酸をなめさせられた後、何とか別のジャングルを切り開いて、沖縄出身の人々は自らの移民地＝コロニア沖縄（現ボリビア国サンタクルス州オキナワ村）を築き上げていった。

コロニア沖縄から、さほど遠くない場所に、九州出身の人々はサンファン・コロニアという移民地を造成していった。そして、この二つの移民地は、それぞれに相当な規模に達する。今日では、コロニア沖縄の場合、おおよそ一人当たり 50 ヘクタールの農地を確保している。

14. コロニア沖縄とサンファン・コロニア

自然そのままのジャングルを開拓して、それだけの農地を確保するまでには過酷な労苦の日々があった。が、さまざまな曲折と長い年月を経て、両移民地ともに、農耕で食べていけるぐらいの土地を確保し、それぞれに牧畜を行い、さまざまな農産物を生み出すまでになっていった。

ところが、そのコロニア沖縄とサンファン・コロニアとの間には、あまり行き来がない。距離的には決して遠くはなく、両者の間は、せいぜい数十キロから百キロ離れているに過ぎない。つまり、往来しようとすればいくらでもできる距離であるにもかかわらず、両者の交流は浅い。　必ずしも両者の関係は良好とはいえないのだ。その背景をなす要因の一は、日本本土出身の移民の、沖縄出身の移民に対する差別意識と言わざるを得ない。

近代国民国家・日本は、琉球王国として長らく独立を保ってきた一つの国を「琉球処分」によって日本国に編入、琉球藩さらには沖縄県にしてしまいながら、植民地的な扱いをするという二重苦を強いた。本土出身移民の差別意識の源泉には、未だにこうした歴史が宿っているように思われる。

戦前においては、沖縄の人々は本土に来るといやな思いをさせられることが多々あったことと同根の事実といえよう。植民地化された朝鮮半島から日本にやってきた人々が差別をされたのと同様な差別を受けることが多々あったのだ。

こうした旧来の認識が、今日の移民地に残存していたのである。そうなると、対抗意識、防衛本能ではないだろうが、沖縄出身の移民の人びとも、本土出身の移民の人びとは「ヤマトンチュ」、自分たちは「ウチナンチュ」というように「差別」ではないけれども、明確に両者を「区別」する。

自分たち「ウチナンチュ」の移民地であるコロニア沖縄と、「ヤマトンチュ」の移民地であるサンファン・コロニアとは互いにさほど協力関係もない、交流もない関係でいいのだというような醒めた見方をすることになる。

であるから、農産物の集配、販売等々にしても、コロニア沖縄とサンファン・コロニアという日系の両者が協同で業務を行えば、能率化や経費節減を図れるし、より高い収益を上げられることは日の目を見るよりも明らかであるにもかかわらず、諸々の業務は全く別個に行われている。両コロニアの間には暗くて深い溝が横たわっているのである。

15. ボリビアの日系社会

コロニア沖縄及びサンファン・コロニアの両者は、カナダの日系社会とは異なり、それぞれに強固な日系社会を形成し、それを保持している。そこには、かなり自己完結的な日本的なコミュニティが形成されている。自治組織があり、農協的な役割を果たす機関があり、学校、医療機関、商店等々も存在し、その中で、一応、完結した生活が営める。

通婚に関しても、まだまだ日系人同士が結婚することが多い。親もできうるならば自分の息子や娘には日系人、あるいは日本人と結婚してもらいたいという願望を強くもっている。カナダに比べるならば、それを望むことが可能な状況がまだ残存しているのだ。

先にも触れたように、日系社会が明確に残存しているという意味において、～カナダの日系社会（という言い方は最早できないかもしれないが）とは好一対をなすという意味において～私はボリビアの日系社会、ボリビアの日系人に着目する。さらには、カナダは先進国であるのに対して、ボリビアはまだまだ発展途上国であり、両者は国情も極端に違っている。

未開の地を目指した移民は、先進地域へ移民していった人々とは違う人生観等を持っている。

移住後の文化変容の態様も大きく異なっている。こうした点に関しても目を向け、比較考察を試みたいと考えている。

16. ハワイの日系社会

ハワイの日系社会にも触れておかねばならない。それは先述の通り、ハワイの日系社会は、他の日系移民地とはまったく異なる状況を呈しているからである。日系人がマジョリティなのだ。

ハワイの人口約百万人のうちの二十五万人が日系人である。エスニック・グループとしては最大の規模を誇っている。「数は力なり」ではないが、やはりそれだけまとまった人数がいるということは、ハワイの日系人にとってはさまざまな局面において生きやすさが保たれていることを意味する。

経済、政治、社会、文化等、各方面におけるハワイの日系人の活躍は周知の通りである。もちろんほかの地域においても、ブラジルで鉱山大臣に日系人が抜擢されたとか、カナダで大蔵次官に日系人が就任した等の例はある。が、これがニュースになる。

ニュースになるということは、こうした例は稀な事例であることの証明に他ならない。日系人は世界各地で着実に、その社会的地位を上げているけれども、まだまだ上のような例は稀有といわざるを得ない。

対して、ハワイにおいては、それこそ州の議員はもちろん、連邦上下院議員、州知事周辺、その他、日系人が枢要な地位を占めている。さらには、教員という職能集団においても、日系の人々がかなり強力な立場を占めている。このように日系人優位の社会が形成されているのは、世界中の日系社会を見渡してもハワイだけである。こうした希有な例として、ハワイの日系社会は看過しえない存在なのである。

17. バンクーバー市の旧日本人街

まずカナダの日系人の状況から話を進める。ブリティッシュ・コロンビア州、バンクーバー市のパウエル・ストリートを中心とした日本人街の戦前と戦後の間の変貌の様子に関しては、戦前のバンクーバー日本人街の図は、移民研究家の伊藤一雄氏が描いたもの、戦後の図は、私が 1979 年に調べたものを補足調査して 1983 年に描いたものを参照していただきたい［天沼 1984］。

２１世紀の今日では、かつて殷賑を極めた日本人街＝パウエル・ストリート界隈は、いまや見る影もない。ランドマーク的存在だったいくつかの日系商店も、今では中国系や韓国系に取って代わられてしまった。ストリートの一部はスラム的な様相を呈し、白昼からストリート・ガールが路上で客待ちをしていたり、ホームレスやアル中の人々がたむろしていたりする光景も決して非日常ではない。どこでも大都市の都心の一角においては、そうした光景は当たり前といってしまえばそれまでではあるけれども。

ここでは、スラム化した一角の古い建物をど

んどん壊して、公共的な建物をその後に建てるというパターンが定着しているかのごとくである。弱者切り捨てを伴う都心部再開発といえよう。こうした潮流の中で、パウエル・ストリートやアレキサンダー・ストリート、コルドバ・ストリート等を中心とした旧日本人街にかつての面影はない。

18. アメリカ村からスティブストンへ

ここで話を、和歌山県日高郡美浜町の三尾地区に向けよう。同地区は、アメリカ村と称されている。現在は美浜町の中の人口千人以下の小さな地区である。かつては三尾村という一つの独立した村だった。この地区（村）からは数千人が北米に渡っている。つまり、村の人口の四倍に匹敵する人数が海外へ出ているのだ（この辺り、詳しくは［天沼、1984］参照）。

しかも、そのうちの大多数の人々がカナダに移民していった。わけても同村出身者はバンクーバー近郊の漁村であるスティブストンに集住していた。したがって三尾とスティブストンとは移民母村と分村という関係になる。その三尾の集落にはモダンな雰囲気の洋館が立ち並んでいる。

なぜかと言えば、カナダに移民した人々が、老後、日本の故郷に帰ってきて再定住するというケースが多いので、終の棲家も若い頃に住み慣れたカナダ風、北米風の家にするからである。

この村でカナダ移民の父として慕われているのが、工藤儀兵衛という人物だ。この人物は、カナダへの移民を語るときには忘れてはならない存在だ。元々は三尾村の大工だったが、一念発起、密航同然でカナダに渡り、スティブストン＝フレーザー川の河口に至った。その地で彼は鮭の大群を見た。

鮭は、現地の人々、即ちネイティブ・カナディアン（俗に言うカナダ・インディアン）の人たちも、白人たちも捕まえる。しかし、彼らは鮭そのものは食べても中の卵は全部捨ててしまうことを目の当たりにして工野は、これは商売になると考え、そのネイティブや白人たちが捨ててしまう鮭の卵を拾い集めて、それを加工する作業に手を染めた。

このため、工野は、カナダで漁業関係の仕事を始めた嚆矢といわれている。しかも、彼はある程度現地で成功した後、自分の出身地である三尾の人々を呼び寄せることに尽力した。

そのため、彼の渡加以降、三尾からは多数のカナダ移民が輩出するようになった。したがって幾星霜を経た今日でも、スティブストンには三尾出身者およびその子孫の人々が多数、住んでいる。かつて、そこには三尾村人会という組織があり、三尾からスティブストンに移民した人たちが相互扶助の団体として機能していた。

1970年代後半以降、幾度となく私は、このアメリカ村でフィールドワークを行い、若い頃、長らくカナダに住み、働き、年老いた後、晩年を故郷で過ごしている移民経験者の人たちから聞き書きをしている。その成果の一つが「アメリカ村のふでばあさん」（在日カナダ大使館・日加協会編『日加修交50周年記念論文集』1980）である。移民女性、中津ふでさんのペルソナグラフィは、これに詳しい。

19. ロサンゼルスのリトル・トウキョウ

米国内の日本人街も少し見ておこう。ロサンゼルス中心部には、まだ少し往事の状況を留めている感じで残っている日本人町＝リトル・トウキョウがある。しかし、こういった箇所は多分、早晩なくなってしまうだろう。その一隅に建っているのが、ジャパニーズアメリカン・ナショナルミュージアムである。

1980年代に日系の人たちの苦難の軌跡を残そうという運動が本格化し、その成果として日の目を見たのが、この日系人の博物館だ。この近辺にはロスの東本願寺、高野山、日系のコミュニティ・センター等々、堂々たる日系の建物が散在し、日本人村という観光地化された区画もある。ビジネス街もある。ここでも、かつての日本人移民、日系人の苦難を物語るような歴史的建造物は消え去りつつある。

ただ、ご愛嬌な事に、ここでは～日本では最早、余り見られなくなった～二宮金次郎の像に巡り会える。これは誰がどういう目的で建てたのか不明だが、日本人移民の勤勉、頑張りの精神のシンボルとして建立されたのかもしれない。

20. ロサンゼルスのコリア・タウン

ロス・アンジェルスの韓国人街にも少し触れておこう。韓国人街はいまや日系人街よりもずっと広範域を占めている。ここの建物の玄関を見ると、いくつ有るのかわからないほどたくさんの鍵がついている。どうしてこんなに鍵がついているのだろうか。

1992年夏、私がここを訪ねる直前にロスで大暴動が発生した事がその答である。この事件で甚大な被害を受けたのが韓国人街だった。加害の側は、主に黒人たちだった。

白人たちから抑圧され、差別され、偏見をもたれている黒人の人々と、韓国系の人々とが手を取り合って白人の抑圧に対抗する事が、自らの人権を守り、諸権利を確保するためには必須なのだが、現実には、黒人たちが、自らと同じく抑圧され差別されている韓国人の人々の町を焼き払ってしまったのだった。

なぜか。その理由は明白だ。黒人たちの韓国系の人々に対する羨望・嫉妬・やっかみが根底にあったのである。後発の移民である韓国系の人々は、米国に入ってきてからというもの、日系の人々と同様、よく働き、経済的にかなり豊かになっていった。ロスなどには、広大な韓国系のエリアが存在し、韓国料理店等が林立する、韓国情緒がただよう一角すらある位で、同市における韓国系は既に一大勢力として確立している。

これに対して反感を抱く貧困層の黒人たちが、ある程度、豊かな韓国人街を襲撃する事になったのだった。なぜ、こうした20世紀末の事件にあえて触れるのかといえば、19世紀末から20世紀初頭において、北米の日系人街がよくそういう目に遭っていたからである。

当時、サンフランシスコ、バンクーバーといった西海岸の町々では日系人街が繁栄していた。日系の商店が立ち並ぶ光景は、なかなか壮観だった。そうした日系の繁栄に対して、いわゆるプアー・ホワイトの人々が中心になって反日的な暴動を起こしたのだった。彼らが日系人街を襲撃し、日系の商店を軒並み、めちゃくちゃに壊すといった事件が多発したのだった。

21. 日系一世・二世と三世・四世との世代間ギャップ

サンフランシスコの日本人町も戦前の町の雰囲気はほぼ喪失して、観光地化してしまっている。

こうした観光地化、ビジネス街化に対して、日系三世の人々が中心になって猛烈な反対運動を繰り広げた。つまり、過度な観光地化、ビジネス街化は自分たちのアイデンティティを消滅せしめるという観点から、かつての苦難の歴史を刻印している日系の町並みを残そうという運動を起こしたのだ。

この際、日系の一世や二世の人々はさほど大きな動きはしなかった。一世や二世は、強制収用されたり、差別され続けてきただけに、下手に動くとまた非道い目に遭いかねないとばかりに自主規制をした。こうした一世、二世の対応はアメリカ社会でも、カナダ社会においても見受けられた。

対して、そうしたしがらみがないか、あるにしても収容所に送り込まれたのは幼少時だったために、三世は一世や二世ほどには、その体験に関する生々しい記憶もなく、またアメリカ社会で育っていく中で自らの権利を主張することに関しては、～それこそアカルチュレーション、あるいはアスィミレーションの結果として～、日本人的な思考・行動様式からアメリカ人的なそれに変容していることもあり、さらに加えて日本人移民の苦闘の歴史が失われることによって、自分たちのアイデンティティが失われることを危惧する意識も加わって、サンフランシスコの日本人町を残そうという運動は拡がりをみせたのだった。

しかし、現実的には多くのメモリアルな建物は取り壊されてしまった。

22. サンフランシスコのチャイナ・タウン

対して、歌にも歌われたかの有名なサンフランシスコのチャイナ・タウンは、うまくかつての町並みを利用しながら今日でも繁栄の一途をたどっている。同様な事が、バンクーバー、その他もろもろの北米の都会においてもいえる。

北米各地のかつての日系の町がとんでもない

観光地になってしまったり、寂れてしまったり、潰えてしまったりといった状況なのに対して、どこの北米の町においてもチャイナ・タウンは、それこそ独自の繁栄を誇っている。

このあたりに関しては、中国系移民と日系移民とのパーソナリティや行動様式の相違という観点からも考察を加えるべきであろう。私もこの点について少々、中国系の人々に対して聞き書き調査をしたことがある。

その結果、私は彼我の顕著な差違を見出すことができた。中国系の人々は、先に移民してきて定住し、ある程度、安定すると、後からやって来る人々の面倒をよく見る傾向がある。

自分たちで住む場所や職を世話し、新たに移民してきた人々が一人立ちするまで面倒を見る。そして、自分たちの力を増殖させ、自分たちの町をより大きくしていく。その過程で、自分たちの町から自国系の議員を出す。自分たちの町を、自らの手でのみならず、政治のレベルからもよくしていくというように、非常に効率的な動きをする傾向がある。これに関しては、トロント、バンクーバー等、カナダの各都市や米国の他の都市についても同様のことがいえる。

それに比するに、日系の人々の間では、（これは日系の人々が異口同音に語ってくれたことだが）、なんとなく足の引っ張り合いが随所で見受けられる。皆で一致協力して何かを成し遂げるというようなことにはなかなかならない。だから、チャイナ・タウンがどんどん繁栄していくのに対して、日本人町のほうは、もうひとつ伸び悩み、いつしか廃れていくのだ。

日系人の場合は、戦時中に定住の地を根こそぎにされるなど、人権が徹底的に蹂躙された経験を有する。そのために、先にも触れたように集住することを忌避する傾向が見られることも彼我の差違を助長する要因である。皆で協力して日系の町を作り上げていくと、またぞろ目だってしまい、戦前のような差別、偏見をもって見られることになりかねないといった意識を持つ日系人は少なくない。集団的心的外傷といえようか。

こうした意識が、結局、全体として大きなコミュニティを作る＝日本人町を形成することを避けようとする傾向につながっているのではないかと思われる。

おわりに

本稿では、アト・ランダムに、補遺的に、国際関係と移民の問題やカナダ移民、ボリビア移民、ハワイ移民等々に関して論じた。次稿以降において、実際的にそれらの移民社会の様相を語っていくこととしたい。

参考・引用文献

「はじめに」掲載の諸拙稿
天沼香未刊「カナダ・フィールドノート」
天沼香未刊「ボリビア・フィールドノート」
天沼香未刊「ハワイ・フィールドノート」
天沼香未刊「満州ノート」